

ひふりおてか



同志社大学図書館報 №29. 1981. 4. 1

Social Studies のためのアペリチェフ

経済学部教授 野 間 俊 威

今年も経済学・政治学・社会学を専攻しようとする2000名近い新入生諸君を迎えました。これら3系列の学問には幾つかの共通点がありますので、新入生諸君に1日もはやく社会科学書に親しんでいただく意味からも、各専攻分野に本格的に入るまえのいわばアペリチェフになるかもしれない幾冊かの書物を紹介させていただこうと思います。

経済学・政治学・社会学（もっと広くいえば、心理学や人類学も）は相互に関連が深い学問であり、もともと不可分離の関係にあるといってもよいでしょう。南北問題の権威でノーベル賞受賞者のグンナー・ミュルダールは、『反主流の経済学』（ダイヤモンド社、1975年）というエッセイのなかで、社会的現実の一部を、たとえば「経済的」として

分離することは論理的に不可能で、現実には存在するのは「経済学」あるいは「社会学的」な問題ではなくして、単に問題があるのであり、経済的・社会学的・心理学的要因はつねに複雑に絡み合っていることを強調しています。同じことは例を「イギリス病」にとってもいえるわけで、「『イギリス病』は経済的現象か、それとも社会学的現象か」といった捉え方では意味をなさないことになります。そこで、いわゆる学際的な研究の必要性が叫ばれ、実際種々の共同研究がなされてきたわけですが、ミュルダールはこれらの試みによって反って社会諸科学間のギャップが広がっていった事実を指摘しています。ミュルダールはそこで、学際的討論の必要性は当然なこととしても社会科学にいま必要なのは、個々の専門分野を超えた“transdisciplinary”な研究であると説きます。専門分野を股いだという意味です。もっと平らたくいえば、

目 次

Social Studies のための

アペリチェフ（野間俊威）…	1
アヴィニヨンの夏（大木久雄）………	2
いよいよスタートする図書業務の 電算化………	4
世界史に関する二次文献について（上） 世界史一般・西洋史………	6
実例を中心とした資料のさがし方………	12
ピックアップ「鎖国時代の 日本人漂流記」………	14

経済理論を一通り知っている社会学者や政治学者、或は逆に、社会学的センスの十分ある経済学者の要請です。どうしてかという、諸科学は近代以後、科学的厳密性を追求しようとして社会の一側面を抽出しただけのものとなり、また多くの仮説（捨象）のうえにたって分析の武器を研ぎすましてきたために、部分的認識をいくら寄せ集めても全体的認識にはならぬといったことが起るからです（アドルノ・ポパー他『社会科学の論理』河出書房新社、1979年；難波田春夫『日本再建の哲学』経済往来社、1979年など）。実証性を守るために試行錯誤の過程を繰返すか、全体的認識を獲得するために「客観性」を犠牲にしてまで直覚に頼る社会哲学的思惟や強い価値前提（ミュルダール『社会科学と価値判断』竹内書店、1971年）を導入すべきかは見解の分れるところであり、未解決（解決不能）の問題といっても過言ではありません。

こうした解決不能に近い方法論議はさておいて、「危機」が叫ばれた70年代にはミュルダールが示唆したようなクロスオーバー型の書物が多く現ははじめました、マルクス、ウェーバー、デュルケム、シュンペーターといった古典とは比較にならないでしょうが、私の好みでは、以下の書物は決してキワ物として片付けられない問題の核心をついた佳作といえるのではないかと思います。

まず、アメリカの社会学者ダニエル・ベルの『資本主義の文化的矛盾』（講談社学術文庫、1976年）は装丁が余りにもコンパクトなため損をしています、PRのいきとどいたガルブレイスやフリードマンの書物に決してひけをとらぬスケールで、大胆な議論が展開されています。機能的合理性（効率）を中軸原則とする技術・経済システムと正当性（公正）の政治システムと自己実現の文化システムがそれぞれ原理的独立性をもって相互作用を起し、その矛盾が196、70年代の先進社会に急速な社会変動を惹き起したという議論です。フランスの社会学者ミシェル・クロジェ他が執筆した日米欧委員会編『民主主義の統治能力』（サイマル出版会、1976年）は政治的民主主義のジレンマを余すところなくベシミスティックなトーンで分析しています。村上泰亮氏の『産業社会の病理』（中央公論社、1975年）は既に定評のある名著です。最近出た野尻武敏氏の『選択の時代』（新評論、1980年）は現代の先進社会の特徴を「多元化社会」として把え、経済体制とともに近代民主主義の自壊作用にまで論及し、近代の転換の必然性を説く力作であり、前出の難波田氏の諸労作とともに社会哲学的色彩の濃いものです。

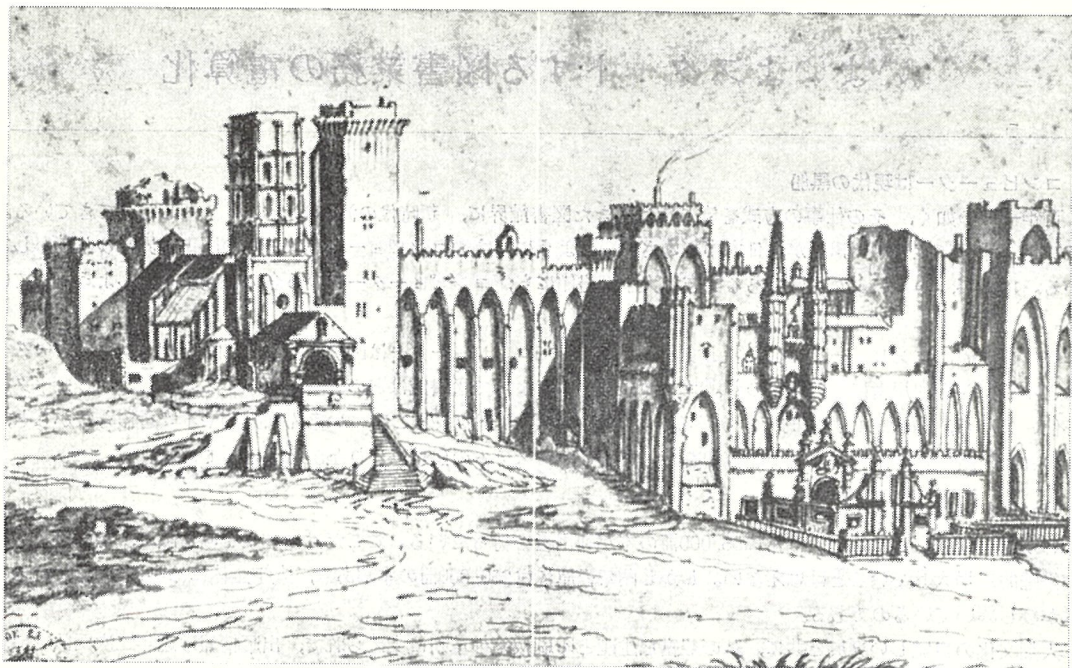
これらの労作のほかにも社会学者ラルフ・ダーレンドルフの『ザ・ニューリパティ』（創世記、1978年）、公文俊平氏の『社会システム論』（日本経済新聞社1978年）、『転換期の世界』（講談社学術文庫1978年）などは読者の知的想像力をかきたてる好著といえると思います（ここでとり挙げた書物は、すべて“transdisciplinary”なものに限られ、特定の専門分野のものは除外してあります。念のため）。

アヴィニヨンの夏

大 木 久 雄

去年の夏、機会があってアヴィニオンを訪れた。アヴィニオンはフランスの南部、地中海の沿岸都市マルセイユの北々西約80軒の地点、ローヌ川の左岸にある人口約9万程の地方都市である。大体、夏になるとヴァカンスで人口が減るのが普通なのにここは観光客、特に若者の大群が押し寄せて異常な程に膨れ上がる。毎年、夏場の約1カ月間、フェスティバルが開かれるからである。催し物は主に演劇、他に音楽、バレエなど。尤もお祭り化して派手になり過ぎたきらいはあるが、ヨーロッパ中から、更に地中海の彼方アフリカからも若者が集まって来る。これは銀行で通貨交換の時、若者のパスポートを見て分かった事だが……。誠に野獣の群れが街の中をさまよう感がある。肌の白いの、黒いの、男・女を問わずそれぞれが大きくて、遅しく、髪の毛が長く、男は大概顔中鬚だらけである。ここには異様なエネルギーがあった。

一方、ここは中世の街でもある。未だに城壁がぐるりと街を取り囲んで、昔のままの城門から人や車が出入りする。そして、城壁に囲まれた街の北側の丘の上あたりに、中世に君臨したローマ教皇庁（法王庁）が聳えている。教皇庁がローマに不安を感じ、フランス王権の圧迫もあって、ローマからここアヴィニオンに居を移したのである。俗にアヴィニオン幽囚とも呼ばれ、1309年から1377年の間の約70年間、7代の教皇がここで寝起きしていた訳である。ここを見学した時、特に印象に残ったのは教皇の寝室と居室の壁画であった。フレスコ画でやや鮮明さに欠けていた



十七世紀末のアヴィニオン教皇庁のスケッチ

が、寝室には鳥が連なって飛び廻る姿が、居室には城外の山野で、嬉々とした表情の人物が狩りをし、鳥を追い、魚釣りをし、木の実を取っている姿がパノラマ式に描いてあった。教皇たちは日夜これを見て城外に想いを馳せたのであろうか？戒律厳しい修道院で、或る神父が門外で嘲る鳥の奇妙な仕草に誘われて、つい院外に出てしまった途端、彼は鳥に変身し、緑の山野を飛び廻り、ついに永遠の時間の中に生きたという夢幻的な物語を、ふと思い出した。しかし、ここの住人たちは些か違っていたようである。ここの教皇たちはもっと生臭く、聖職売買で私財を蓄えたり、婦人との関係を疑われるなど、評判は良くなかったらしい。それだけ人間味があったのかも知れない。それと、もう一つ、この居城の中の教会に一冊の聖書が展示してあった。いつ頃のものか説明を聞き落としたが、恐らくこの城の住人たちの手に触れたであろう、正に書物であった。ここには中世の重みと人間臭いぬくもりがあった。

アヴィニオンの夏は一日が長い。午後9時頃になってやっと日が暮れる。催し物は9時半頃に始まって夜中の一時過ぎに終る。この一日の長さを若者たちは休むことなく消化していく。ローヌ川に沿った城壁寄りの道に露店が並んでいた。ここでヨーロッパ・ヒッピー族？の若者たちが奇妙な手工芸品を並べて、生活の糧としていた。装飾用品、皮製品、石細工、木彫品など。この中にラヴェンダーの壺を売る店があった。ラヴェンダーは高さ60センチ程のシソ科常緑半灌木で、地中海沿岸の原産。頂に穂状をなして青紫の小花をつけ、この花を蒸留して香料とする。昔は王侯、貴族の子女がこれを匂い袋に忍ばせて、殿方共を悩ませたとか。この店の前を通ると甘い、さわやかな匂いが漂っていた。その店の横で、地べたに坐ってフルートを吹いている若者がいた。その前に帽子が置いてある。結構いい音色を出している。これで旅費が出るらしい。ここを通り抜けると、民謡で有名な例の橋に出くわす。「アヴィニオンの橋の上で、輪になって踊ろう」。橋は途中までしかなく、誰も踊っていなかった。傍を通る人々も無関心で、立ち止まる人は一人もいなかった。ホテルに帰る道筋に本屋があった。ここに偶然にも半年程前、目録カードを作ったプロヴァンス語―フランス語辞典が並べてあった。値段を見ると思ったより安かった。要するに送料と手数料が高過ぎるのである。その隣の時計屋にセイコーとオメガの腕時計が仰々しく並び、次の通りのカメラ屋にはキャノン、ニコンなど日本のカメラが所狭しと並び、その隣の銃砲店には猟銃と一緒にピストルも並んでいた。ここには現代の顔があった。

帰途、飛行機の窓からアラスカの山野を望見した。マッキンレーの山脈を蔽う万年雪、その一面の白さと氷河地帯、その麓から海岸線まで続く緑一面の森林地帯と原野、この中を蛇行する川。この雄大な景観の中に人間の匂いはなかった。

アラスカの自然、中世の重みとぬくもり、若者のエネルギー……これらを結ぶ相関的な図式は何もない。唯、現代に生きている者にとって、実感として理解できる文化とは一体何なのか？こんなことをぼんやり考えてみた時、ここに何らかのヒントがあるような気がした。書物は機械化のあおりを受けて、ぬくもりとしての機能が消されようとしている。こんなことはどうでもよいことなのかも知れない。

いよいよスタートする図書業務の電算化

コンピューターは現代の黒船

百年一日の如く、その仕事の方式を守り続けてきた図書館界に、新時代の波がひたひたと押し寄せてきている。1853年、浦賀に来航した黒船が、日本中をゆさぶったように、今やコンピューターは日本の図書館界をゆり動かしている。1981年、いよいよわが伝統ある同志社大学図書館にも、コンピューターという名の怪物が登場しようとしている。

何故図書館はコンピューターを必要とするのか。果してコンピューターは図書業務になじむのか。コンピューターはどんな利益を利用者にもたらすのか。コンピューターによって図書館はどのように変貌するのか。コンピューターを使いながら、私たちは人間的であり得るか。私たち館員も正直なところ、いろんな疑問や不安を懐きながらも、「いまは決断のとき」という一つの確信をもって新しいシステムの建設にとりかかろうとしている。

情報量という圧倒的な外圧

わが図書館の開架閲覧室には常に55,000冊の本が利用者を待っている。ここだけの光景をみる限り、特に出版情報は飛躍的に増大しているとは思えない。しかし閉架書庫には250,000冊の本があり、大学全体には実に900,000冊もの本がひしめいているのである。

人類文化の目覚ましい発展と共に、紙の豊富な生産と印刷技術の革新に支えられて、出版情報は近年二次函数的に増大している。これに対応して大学の図書受入冊数も急激に増加している。当館整理課の年間整理冊数も数年前までは20,000冊台であったのが、一昨年度には40,000冊台を記録するに至っている。簡単に言えば、過去100年分の受入冊数が最近の10年分で達成され、またこれからの5年分の受入冊数が、それに匹敵するだろうという勢いである。

新館竣工以来、未だ10年にもならないというのに、この先書庫が何年もつか、カードボックスの置き場所がどこかに確保できないか等の心配をはじめる始末である。この様に押し迫る外圧のため、これまでの仕事のやり方ではどうにもならなくなったというのが館員の実感である。

本は沢山あればいいというものではない

かつて図書館界には、その蔵書量を誇る気風があった。もちろん、量だけではなくてその質も問われなければならないだろう。しかしどんなに良い本が、どれだけ沢山あっても、その本がこの図書館に「ある」ということが利用者にわからなければ、何の役にも立たない。今出川キャンパスの貴重な空間を専有しながら、永遠に利用されない本ほど惨めなものはない。

本屋さんの店内で、いろいろ本を捜している時は、誰でも楽しいものである。捜している本の他にも、いろんな本が目について、読書欲をそそられたりする。開架閲覧室でもこれに近い楽しさを感じることができる。しかし、学部研究室の書庫には、本の増加のために、6段式書架が9段式になり、天井まで本が詰まっているところもいくつかある。双眼鏡でもなければ上の方の本は何かわからないという様な状態では、研究者にとって開架書庫とは言えないだろう。

また、今年2月の図書館の利用状況をみると、開架閲覧室の月間貸出冊数は14,000冊であるのに、開架冊数の5倍の蔵書を擁する閉架書庫の月間貸出冊数は1,000冊にすぎない。閉架書庫の本を借りるには、カード目録で本を捜さなければならない。カードボックスの前で腰をかがめて、難しい規則で配列されているカードを1枚1枚めくり、やっと見つけたら申込用紙にいろいろ書き込まなければならない。これは全く楽しくない行為である。こうして、閉架書庫の膨大な本は日の目を見ることが少ないのである。

カード目録や冊子目録はもはや限界

沢山の本の中から、ひとりひとりの利用者がどのようにして自分の欲する本を見つけ出し得るか。開架閲覧室の図書であっても、その分類がわからなかったり、閲覧中や貸出中のものは見つけられない等の問題があるが、閉架書庫の本については、カード目録か冊子目録で捜すはかばかしい。

当館では、新分類の図書については次のように冊子目録を発行してきた。

第1巻 1964—1966年度整理分 21,000タイトル収録 1969年2月発行

第2巻	1967—1969年度整理分	27,000	タイトル収録	1971年3月発行
第3巻	1970—1972	“	31,000	“ 1974年3月 “
第4巻	1973—1977	“	60,000	“ 1979年3月—1980年2月発行（4分冊）

冊子目録はカード目録と違って1頁当たり約30タイトル、見開きにして約60タイトルの図書情報が一度に目に入り、一覧性に富んでいる。また学内各所に配布してあるので、図書館に来なくても、図書館の本を捜すことができる。図書館以外の学内各機関が所蔵している本も捜すことができ、便利である。しかし一方、収録期間ごとに分冊されているために、一冊の本を捜すのに、何冊もの冊子目録をめくらなくてはならない。また発行までに多くの人手と年月を要するため、最近2、3年の新着本は捜せないといった大きな欠点もある。そして年々その欠点は増幅されてゆき、余り利用されなくなる。

さて、カード目録の方は、常にアップツードイトに目録が編成されるという長所はあるが、カード枚数が増えるにつれて捜しにくくなるという致命的な欠陥を持っている。例えば書名目録で本を捜すとして、カード枚数が30枚ぐらいなら、アルファベット1文字のイニシャルだけでも捜すことができるだろう。しかし200,000枚といった規模になると、アルファベットの5文字目～10字目のところまで配列を見て捜さなければ見つからないケースが増えてくる。こうなると、カード目録は次第にその機能を失い、だんだん利用者から敬遠されるようになってくる。昔の図書館では、今のように急激にカード枚数が増えることなど、思いもよらなかっただろう。閉架書庫の本が利用されなくなる傾向は、これまた年々増幅されてゆくのである。

コンピューターが本を捜してくれる

数台のテレビのようなもの（ディスプレイ）が各所に置いてある。それにはカタカナとアルファベットのボタン（キー）が並んでついている。利用者が「ケイザイガクセツシ」というようにカタカナのボタンを押すと、たちまち何冊かの「経済学説史」という漢字の書名とその著者名が画面にあらわれる。そのうちの一つを選ぶボタンを押すと、「経済学説史 美濃口武雄著 東京青林書院新社 1981年 390頁 22cm 請求記号 331.2；M12-2 開架閲覧室」と詳しい情報が漢字であらわれる。もし貸出中なら「現在貸出中、4月9日に返却される予定、よろしければ予約も受け付けます。」といった応答も可能である。貸出中でなければ、開架書架からその本を持ってきて、入館証と共にカウンターに出せば、光学読み取り装置（固定式スキャナー）の上に入館証と本を乗せて、一瞬のうちに貸出手続きは完了する。ブックカードに記入したりする必要は全くない。

以上のような光景はアメリカの大学図書館などでは、10年も前から見られている。当館でも、しようと思えば今すぐにも、技術的には可能である。しかし、残念ながら、当館所蔵の本の情報は、今のところ一件もコンピューターで読める形になっていない。つまり、データベースがないのである。

当館の業務電算化構想

昨年6月、当館整理課に「目録の電算処理検討委員会」が設置され、以来、業務電算化の調査、検討が続けられてきた。情報検索を電算化するためには、まず個々の図書情報を電算機に入力し、データベースを形成していかなければならない。この4月からいよいよ目録の電算化を中心に、入出力システムの設計にとりかかる。早ければ、9月頃から整理される図書の情報は、すべて電算機に入力されることになるだろう。そして目録カードは、すべて見やすい活字体で、電算機によりプリントされるだろう。数年のうちに、ある程度のデータベースが形成されれば、前述のような検索システムが、利用者の前に登場するだろう。もちろん、カード目録も当分の間、従来どおり維持、併用されることは言うまでもない。

また目録システムを皮切りに、雑誌システム、収書・受入システム、貸出・返却システム、レファレンスシステム等を含めた電算化トータルシステムの実現へ、全館をあげて大きく動き出そうとしている。

その過程で幾度か紆余曲折があるとは思いますが、利用者が資料にたやすくアプローチできるようにするための電算化であることを常に念頭に置いて、電算化をすすめていきたい。そうすれば図書の利用は益々増えるだろう。図書館の本は、いつも利用されることを熱望しているのである。

同志社大学教学の中心として、最大限にその機能を発揮できるような図書館を、学生諸君や研究者の方々と共に、創っていきたくと願っている。

（滝川）

世界史に関する二次文献について (上)

世界史一般・西洋史

世界史に関する資料を紹介します。世界史の分野は非常に広範囲にわたりますが、今回は本館に所蔵するものを中心に、世界史一般と西洋史に関する包括的な文献案内、解題書、目録、索引等を取りあげました。東洋史については、次号で紹介する予定です。

なお請求記号についている㊦は雑誌参考図書室図書、㊧は新分類図書、㊨は旧分類図書、Pは雑誌を表します。

〔1〕 世界史一般

1. 世界歴史の基礎知識 (1) (2)

西嶋定生等編 有斐閣 昭52(1977). (㊧209; S 9)
古代から現代に及ぶ世界史の基本的 テーマ 214項目をヨーロッパ、アジア(四地域)、アフリカ、アメリカ大陸の七地域と20世紀の国際関係に区分配列し、最新の学説にもとづき解説。項目の末尾に若干の参考文献をかかぐ。下巻に事項、人名、書名等の五十音順索引を付す。

2. 歴史の名著 上下

歴史科学協議会編 校倉書房 昭45—46(1970—71). (㊧204; R)
上巻は日本人篇(25点) 下巻は外国人篇(20点)とし歴史学関係の著作を収め解題。その内容とともに著者の経歴や他著作との関連にも言及し学説に対する評価も加える。マルクス主義史観にもとづく著作が中心。

3. 史学名著解題

千代田謙等著 共立社 昭6(1931). 137, 149, 75P.
(現代史学大系 第15巻) (㊧908; G)
西洋編、日本編、支那編に大別。西洋編は年代順に史学者を項目とし解説、日本編は史籍を論評し、支那編は史籍名または件名を項目として関連史籍・参考書を解説。日本編には簡単な索引を付す。

4. 世界歴史大系 全25巻

平凡社 昭8—11(1933—36). (㊧908; S3—1a)
第25巻 史籍解題 遠藤元男等編 昭11(1936)
次項5を参照

5. 国史東洋史西洋史籍解題

遠藤元男等編 平凡社 昭11(1936). 250, 283, 193,

82, 93, 8P. (㊧016.9; E)

前項の「世界歴史大系 第25巻 史籍解題」を単行書として同時に発行したもの。国史東洋史の部は史料・史料集等を五十音順に配列解説し 国史研究参考書目(P. 231—250)、東洋史研究参考書一覧(P. 255—283)を付す。西洋史の部は欧文献を時代順国別等に分類し著者順に配列解説。それぞれに書名索引を付す。

6. 鎖国時代日本人の海外知識 一世界地理・世界史に関する文献解題

開国百年記念文化事業会編 乾元社 昭28(1953). 498P. (㊧016.909; K)
江戸時代初期から明治元年以前までの日本人によって書かれた、または翻訳・翻刻された世界地理、西洋史関係の文献・資料の解題書。西洋史の部(P. 368—457)は西洋史の研究、オランダ史、ロシア史、イギリス史、アメリカ史、西洋通史の六篇に分け解題。巻末に本書で取上げた図書史料の文献年表と人名・文献索引を付す。

7. 史学文献目録 1946—1950

史学会編 山川出版社 昭26(1951). 204P. (㊧016.9; S)
史学会創立六十周年の記念事業として出版。昭21年1月—25年12月の間、わが国で発表された史学関係の雑誌論文と単行本の目録。一般・日本史・東洋史・西洋史に区分しさらに単行本・論文ごとに時代順に配列。巻頭には収録した論文の所載雑誌・論文集のリスト(約400タイトル)と巻末に著者索引を付す。

8. 世界史大系 全18巻

誠文堂新光社 昭32—41(1957—66). (㊧209; S 3)
別巻 総索引 昭35(1960). 334P.
総索引(P. 1—269)、世界史参考文献目録(P. 271—

326), 参考付表 (P. 327~344) よりなる。目録の収録範囲は、戦後刊行された単行本を中心に昭和以降のものを加える。歴史学一般, 世界史, 考古学 (民族・民俗・人類), 東洋史, 西洋史と世界史にあらわれた古典の六部構成。巻末に執筆者一覧を付す。

9. 雑誌記事索引 人文・社会編 累積索引版 IX 歴史・地理

日外アソシエーツ編刊 紀伊国屋書店 (発売)
(P 027; Z 3)

第1期 (1970—74年累積) 昭51 (1976)

第2期 (1965—69年累積) 昭52 (1977)

第3期 (1955—64年累積) 昭54 (1979)

国立国会図書館編集の「雑誌記事索引」人文・社会編の中から歴史・地理関係の論文等を再録編集したものの。歴史学, 考古学, 世界史, 日本史, アジア・アフリカ史, ヨーロッパ史, アメリカ・オセアニア史, 伝記・系譜, 地理・地理学, 紀行の10分野に大別, 細区分のもとに件名見出をたて配列。主題索引を主体とし著者名索引, 収録誌一覧を付す。

10. 日本における歴史学の発達と現状 一日本史・東洋史・西洋史 I—V

国際歴史学会議日本国内委員会編 東京大学出版会
昭34—55 (1959—80). (参201.2; K)

5年毎に開かれる国際歴史学会議へ, 日本の歴史学界の研究動向と研究成果をまとめ提出した報告書の日本語版。一般・日本史・東洋史・西洋史の分野における, わが国の研究水準を示す主要な単行書と雑誌論文を網羅的に収める。収録対象期間は次の通り。

I 1930年頃~1958年 付・人名索引

II 1958年前後~1962年 “ ” ; 定期刊行物一覧

III 1963年~1967年 “ ”

IV 1968・9年~1973・4年 “ ”

V 1973年~1977年 “ 研究者索引, 機関索引, 逐次刊行物一覧

以後を補うものについては次項11の「史学雑誌」を参照

11. 史学雑誌

史学会編 山川出版社 (P 200.1; S 2)

第59編 (1950) 以来毎編の第5号 (第79編のみは第6号) に前年のわが国の歴史学界の「回顧と展望」を特集している。各号の末尾に付していた史学文献目録は第72編 (1963) から毎編以下のように各号により区分し収録。

日本史……3, 4, 7, 8, 11, 12号

東洋史……2, 6, 10号

西洋史……1, 5, 9号

12. Bibliography of Japanese historiography, 1969—1973.

Ed. by The Japanese National Committee of Historical Sciences. Univ. of Tokyo Press. 1976, 264 P. (参028.2; K)

項目№10のIVの中の論文・著述を抄出して英訳した文献目録。歴史一般, 日本史, 東洋史, 西洋史に大別し国別地域別の時代順に著者のABC順に配列。索引はなし。項目№10参照

13. Historical studies in Japan, 1973—1977: a bibliography: Japan at the XVth international Congress of Historical Science in Bucharest.

Ed. by The National Committee of Japanese Historians. Univ. of Tokyo Press, 1980, 410 P. (参028.2; K—2)

前項12と同様のもの。項目№10のVの中の文献だけを英訳 (書名・論文名は日本語文をかかげ, その後に訳語を付す) したもの。巻末に逐次刊行物一覧と著者索引を付す。項目№10参照

〔2〕 西洋史

14. 入門西洋史学

前川貞次郎編 ミネルヴァ書房 昭40(1965). 258 P. (参230; M)

初めて西洋史研究を行う人のための手引として企画。わが国で今まで論じられた問題とその研究成果が大部分を占めると同時に, 外国の研究成果・動向を多く取上げられている。構成は原則的な3時代区分法による。巻末に西洋史全般に関する戦後の主要な参考文献抄がある。索引なし。

15. 日本西洋史学発達史

酒井三郎著 吉川弘文館 昭44(1969). 377 P. (参201.2; S2)

1543年の南蛮人の渡来を契機とした南蛮学・西洋学の発生から1950年までわが国の西洋史学発達の研究書。

1. 日本における西洋史叙述のはじまり, 2. 西洋史概説の種々相, 3. 日本的西洋史学の成立, 4. 転換期の西洋史学, 5. 1950年にたつて, に分け日本史学界の主要著作・学説を論述批判。巻末に日本西洋史学細分化を見る年表 (P. 327~367) と索引を付す。年表は, 第1次大戦時代の1914—17 (大正3—6) と20年後の1934—

- 37 (昭9—12)の同じ4年間に、わが国で発表された文献を著書および訳書の部(約380点)と論文の部(約700点)に分け年代順に対置配列し、西洋史学細分化のあとを文献を通じ概観したもの。
- 16. 西洋史研究入門**
井上幸治, 林健太郎編 東京大学出版会 昭29(1954). 461 P. (Ⓔ930; I 2)
わが国の西洋史学界の研究成果と問題を取りあげ、関係文献を解説した代表的な研究入門書。古代・中世・各国史・国際関係・歴史学上の諸問題・世界史像の問題の6章より成る。本文の随所で参考文献にふれ、各節の末尾に注・文献解説等の形で主として欧文の主要な参考文献をあげている。索引なし。
- 17. 大学ゼミナール西洋史**
中山治一編 法律文化社 昭48(1973). 346 P. (Ⓔ230; N 2)
大学の教養課程および専門課程の学生を対象とし西洋史の教科書・参考書として編集。エーゲ文明から1945年までを総論と本論6章に区分し重要な問題点を指摘し、研究史を解説した入門書。各節の末尾に邦文の主要な参考文献を網羅す。索引なし。
- 18. 西洋史料集成**
平凡社 昭31(1956). 1166 P. (本館なし)
同社の「世界歴史事典 第24・25巻史料編一西洋Ⅰ・Ⅱ」を合冊、単行本として発行したもの。次項19を参照
- 19. 世界歴史事典 全25巻**
平凡社 昭26—30(1951—55). (Ⓔ203・3; S 2)
第24巻 史料編西洋Ⅰ 昭30 P. 1~554
第25巻 史料編西洋Ⅱ 昭30 P. 555~1166
史料集(第24巻と第25巻の前半)と文献解説(第25巻の後半)からなる。前者は古代篇、中世篇、近代篇、国際関係篇に大別、基本的史料の引用を主とし解説を付し、各時代各国別に史料総説を配す。後者は一般篇、古代篇、近代篇に分ち時代国別に西洋史に関する欧米の代表的な研究文献を解説。巻末に史料項目表と索引を付す。
- 20. 西洋史参考書略解題** 早稲田大学出版部蔵版
高桑駒吉著〔出版社出版年不明〕400 P. (Ⓔ016.93; T)
世界史、古代史、希臘史、中世史、近世史に区分し主要な参考文献の解題書。索引なし。
- 21. Standard catalog for public libraries : history and travel section.**
Compiled by Minnie Earl Sears. H. W. Willson Co. 1929. 285 p. (Ⓔ016.9; S 2)
1929年の前半までに出版された世界史、地誌関係の約1900点の英文文献をデューイ分類表により配列。値段と分類番号をつけ巻末に著者・書名・件名索引を付す。
- 22. Manual of historical literature.**
By C. K. Adams. N. Y. Harper. [preface 1888] 720 p. (Ⓔ016.9; A)
世界史一般、西洋史に関する欧文献の解題書。約900余点の収録文献を16章に区分し、時代順国別に応じ著者名順に配列。巻末に索引を付す。
- 23. 天理図書館所蔵古代オリエント関係外国語図書分類目録 1974年現在**
日本オリエント学会編刊 昭54(1979). 360 P. (Ⓔ208.209; T)
1974年までに整理された同館所蔵の古代オリエント関係の外国文献約6,000点の目録。総記、エジプト、メソポタミア、イラン、シリア・パレスティナ、小アジア、アラビアの7部に区分し配列。一連番号と請求記号を付す。
- 24. 栗野文庫目録**
関西学院大学図書館編刊 昭49(1974). 134 P. (Ⓔ028.231; K) (関西学院大学図書館特殊文庫目録第4輯)
同大学名誉教授故栗野頼之祐氏旧蔵の碑文、パピルス文庫など貴重な文献を含む古代ギリシヤ・ローマ史関係の欧文の学術図書1,321点を収録した目録。第1部単行本、第2部定期刊行物、第3部を第1部の書名索引とし、各記述に請求記号を付す。
- 25. Subject catalog of the World War I collection.**
Ed. by the New York Public Library, Reference Dept. 4 Vols. G. K. Hall & Co. 1961. (Ⓔ016.909; N)
ニューヨーク公共図書館に所蔵する第1次世界大戦に関するコレクション約35,000冊の件名目録のカードを縮刷した目録。
- 26. A Subject bibliography of the First World War: books in English, 1914—1979**
A. G. S. Enser. Andre Deutsch, 1979. 485 P. (Ⓔ028.209; E—2)

1914—1979の間に 英文で 発表された 第1次世界大戦に関する目録。40頁以下の小冊子や文芸作品, war graves comission 等の出版物は除外。件名の下に文献を著者名順に配列。巻末に著者名索引と索名索引を付す。

27. A subject bibliography of the Second World War: books in English, 1939—1974.

Ed. by A. G. S. Enser, Andre Deutsch, 1979.
592 P. (㊟028.209; E)
前項26と同様の構成

28. Modern European imperialism; a bibliography of books and articles, 1815—1972 2 Vols.
By John P. Halstead & Serafino Porcari. G. K. Hall, 1974. (㊟028.23; H)

Vol. 1 General and British Empire.

Vol. 2 French and other empires. Regions.

1815—1972の間に発表された帝国主義に関する欧文献目録。雑誌論文は英米仏のものに限定。1巻は帝国主義一般とイギリスならびにその植民地篇, 2巻はフランスその他諸国とその植民地に関係する文献を収録, 巻頭に収録雑誌名のリストを付す。

〔3〕 各 国 史

29. イギリス史研究入門

青山信吉等編 山川出版社 昭48(1973). 485 P.
(㊟233; I 2)
中世・近代・現代に大別さらに各章をほぼ世紀ごとに区分し基本的な研究文献の解説を中心としながら研究動向を概説。付録として, イギリス史特殊用語解説 (P. 309~348), イギリス史特殊用語解説 (P. 349~399), イギリス史に関する内外の基本文献・雑誌目録 (P. 400~447), 研究者索引等を付す。

30. Anglo-Normon England 1066—1154.

Ed. by Michael Altschul. Cambridge, Univ. Press for the Conference on British Studies, 1969. 83 P.
(Conference on Britishe Studies, bibliographical handbooks) (㊟028.233; A)

31. Tudor England 1485—1603.

Ed. by Mortimer Levine. Cambridge, Univ. Press for the Conference on British Studies, 1968. 115 P.
(Conference on British Studies, bibliographical handbooks) (㊟028.233; L)

32. Restrtaion England 1660—1689.

Ed. by William L. Sachse. Cambridge, Univ. Press for the Conference on British Studies, 1971.
115 P.

(Conference on British Studies, bibliographical handbooks) (㊟028.233; S)

№30はノルマン朝時代 (1, 838点), №31はテューダ朝時代 (2, 360点), №32は王政復古時代 (2, 350点)の歴史に関する文献目録。3冊とも構成は全く共通で14の主題分野に分類し一連番号を付す。

**33. イギリス革命文献目録 名古屋大学経済学部所蔵
イギリス史研究センター**

名古屋大学経済学部図書室 昭38(1963). 60 P.
(文献シリーズA—№2) 〔整理中〕

イギリス革命 (ほぼ1600—1700) に関する文献 (マイクロフィルムと図書) の昭和38年9月現在の目録。書誌, 資料および研究書 (図書), 資料 (マイクロ), 付録からなり, 著者順に配列。

34. Bibliography of British history: Stuart period, 1603—1714.

Ed. by Godfrey Davies. Clarendon Press. 1928.
459 P. (㊟016.934; D)

17世紀から18世紀初めにわたるスチュワート朝時代に関する目録。主としてイギリス・アメリカで発行された文献3858点を政治・憲法・軍事史から地方史植民地等16章に分け配列一連番号つける。巻末に著者・書名索引と件名索引を付す。

35. Bibliography of British history: the eighteenth century, 1714—1789.

Ed. by Stanley Pargellis & D. J. Medley. Clarendon Press, 1951. 642 P. (㊟016.934; P)

前項№34の続編。18世紀のイギリス史に関する文献目録。収録数4, 558点。

36. アメリカ史研究入門

中屋健一著 東京創元社 昭43(1968). 198 P.
(㊟253; N 3)

初学者や学生のためのアメリカ史研究の入門書。序論, 第1章アメリカ史学の発達~第6章アメリカ政党の特質の6章に分ち, アメリカ史の特徴を概説。多くの内外の主要文献を紹介。

37. アメリカ史研究入門

清水知久等著 山川出版社 昭49(1974). 6, 354 P.
(㊟253; S 6)

大学で歴史を学ぶ学生とアメリカ史に関心をもつひとを対象。1600年以後のアメリカを大きく5の時代に分け、さらにいくつかのテーマをたてて解説し内外の主要研究文献を紹介。付録としてアメリカ史基本文献（P. 332～344）、定期刊行物リスト（約30タイトル）等を収め、巻末に研究者名索引を付す。

38. **Harvard guide to American history.** 2 Vols. Rev. ed. Frank Freidel, Editor. With the assistance of Richard K. Showman. Cambridge, The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1974.

（㊦028.253；F）

1970年6月30日までに出版された学術書と論文の目録。第1巻は経済・社会・文化史と伝記類に関する文献に重点をおき、第2巻は政治・外交史関係の文献を重点に収録。主題の下に時代順・著書順に配列。第1巻の巻頭に収録論文等の定期刊行物雑誌名略号表を、第2巻の巻末には人名索引と件名索引を付す。

39. **Bibliographic guide to North American history.**

G. K. Hall. 1977—〔年刊〕（㊦028.25；B）

アメリカ、カナダの歴史に関する年間の文献（含非図書資料）の目録。ニューヨーク公共図書館と米国議会図書館で整理された件名目録。

40. **Footnotes to American history; a bibliographic source book.**

By Harold S. Sharp. Scarecrow Press, 1977. 639 P.（㊦028.253；S）

10世紀末の古代スカンジナビア人による北米大陸発見以来、1970年代のハースト誘拐事件までのアメリカ史上313の重要事件を時代順に配列概説し関係文献を列挙。巻末に索引を付す。

41. **アメリカ研究邦語文献目録 一歴史・政治・経済—**
アメリカ学会編 東京大学出版会 昭48(1973). 348 P.（㊦028.253；A）

第二次大戦終了時から1960年代の終わりまでの間、日本で出版された主要なアメリカ研究関係の文献目録。歴史（約1,400点）、政治（約1,800点）、経済（約2,600点）に大別し時代順、主題別に配列。巻末に執筆者索引を付す。

42. **アメリカ研究邦語文献目録 II 一歴史・政治・経済・文学— 1970～74**

立教大学アメリカ研究所編 東京大学出版会 昭51(1976). 277 P.（㊦028.253；A）

1970年—74年の間に、日本で発表された歴史（約730点）、政治（約930点）、経済（約1,510点）、文学（1,620点）に関する主要文献目録。巻末に執筆者索引を付す。

43. **ドイツ現代史総合文献目録**

林健太郎編 東京大学出版会 昭41(1966). 141, 14 P.（本館なし）

1871年—1945年のドイツ史に関する欧文文献で1870年代—1955年頃までに発表された図書・雑誌論文・学位論文約4,500点を収録。著者順配列。分野別、事項別、研究対象人名別の索引を付す。東京大学内の12の機関の所蔵を表示。

44. **大仏次郎氏旧蔵バリー・コミュニケーション蔵書(洋書)目録**
大仏次郎記念会 昭52(1977). 27 P.（㊦028.235；O）

大仏氏旧蔵のバリー・コミュニケーションに関する文献類169種172点205冊の目録。内容はバリー・コミュニケーションに関する記録（公文書・新聞・書簡等）、同時代人の評論、研究書、史的環境その他（文芸作品・古地図・辞典等）に大別さる。

45. **ソビエト史研究入門**

菊地昌典編 東京大学出版会 昭51(1976). 338 P.（㊦238.07；K-3）

大学3・4年生を対象とした入門書。ロシア・ソビエト史研究の基礎知識や研究上の手続とソ連・欧米・日本での研究の到達点と研究動向をまとめ、必要最低限の主要文献（国会図書館、東大等の所蔵機関を表示）を解題したもの。第1部は日本人のロシア・ソ連観、レファレンスブック・基本文献の解説、第2部は10月革命、スターリン独裁体制等の8章よりなる。各章末に必読文献の解題を付す。

46. **Bibliographic guide to Soviet and East European studies.** 1978.

G. K. Hall, 1979. 〔年刊〕（㊦028.3；B2）

1977年9月—1978年8月までの間に発表されたソビエトと東欧諸国の研究に関する全ての言語著作（非図書資料も含む）の目録。芸術・教育・法律・経済等16の分野に区分。

47. **ボリス・スヴァーリン・コレクション目録**

ロシア革命運動資料

北海道大学附属図書館 昭55(1980). 164 P.（㊦028.238；S）

背表紙名:Russian revolutionaly movement literature

in the Boris Souvarine collection [本文はロシア語]
「亡命ジャーナリスト、ボリス・スヴァーリン旧蔵の
ロシア革命運動資料、図書・パンフレット類 835点及
び雑誌類 39種 188点を収録」した目録。図書・パンフ
レット篇は標目の、雑誌篇は誌名のアルファベット順
に配列、一連番号を付す。人名、書名、刊行年の索引
あり。

48. ソ連東欧総覧 '76

ソ連・東欧総覧刊行編集委員会編 読売新聞社 昭51
(1976). (参059.3; S)

ソ連東欧関係参考文献目録 (P. 679~693)

1972年—1977年5月までにわが国で出版された単行本
を収録。社会主義一般、ソ連、東欧に大別し、項目、
国別(東欧)に配列。

49. 文科系文献目録

日本学会会議第一部会編 同会議 昭36(1961). —
(参028; N—2)

23: 1 イタリア学篇 (1975)

23: 2 イタリア学篇 (1976)

戦後わが国で発表された人文科学系論文を主体とし、
関連する社会科学、教養系著述を含む。単行本は1974
年3月まで、雑誌記事は1973年3月までのもの(4,000
字以上のもの原則とし、新聞類、政府刊行物は末収の
もの多し)。〔23: 1〕はⅠ語学・文学、Ⅱ歴史、Ⅲ社
会科学、〔23: 2〕は社会科学(続)、Ⅳ芸術、Ⅴそ
の他に大別著者順に配列。部門ごとに一連番号を付
す。索引なし。

50. イタリア学文献目録

京都大学イタリア文学研究室、日本イタリア京都会館
編 日本オリベッティ株式会社 昭52(1977). 199 P.
(参028.237; K)

前項49の増補版。戦後(1946年)から1975年末までに
刊行されたイタリア関係人文・社会科学系翻訳書と邦
文研究書(単行本・雑誌記事)を主体とし、部分的に
戦前に発表された文献を加える。

51. イタリア近現代史文献目録

イタリア近現代史研究会編 イタリア文化会館 昭55
(1980). 438 P. (参028.237; I)

国会図書館をはじめ大学・研究所等48機関に所蔵する
イタリア史関係文献の所在目録。17世紀から現在まで
のイタリアを扱った和書を除く文献約6,500余点を収
録。一般書、史料、リファレンス資料、雑誌定期刊行
物に大別著者順に配列、一連番号を付す。巻末に人

名、地名、事項の三索引がある。

52. 日本のラテン・アメリカ調査研究書概説

ラテン・アメリカ協会 昭40(1965). 175 P.

(参028.255; R)

日本人が国内で刊行した文献を中心に、外国語文献の
ほん訳や外国で出された日本語の文献等約1,000点の
解題目録。収録範囲は明治以降昭和39年(1964)8月
末までに発行された単行書で大部分は国会図書館およ
びラテン・アメリカ協会の蔵書。総記、地理、歴史、
法律、政治、経済、移住、社会・文化、紀行・探検、
雑に区分し、さらに国別に分類配列。巻末に著者名索
引を付す。

53. 所蔵ラテン・アメリカ資料目録 欧文篇

神戸大学経済経営研究所図書室編 同経済経営研究所
昭45(1970). 191 P. (参028.255; K)

昭和44年9月現在所蔵のラテン・アメリカ地域諸国に
関する欧文図書およびラテン・アメリカ諸国で発行さ
れた図書の目録。収録文献約5,000余冊を洋書分類(
D. C. 15版)を基準に13の主題に区分し国別、編著者
別に配列し請求記号を付す。索引はなし。

54. ラテン・アメリカ文献目録

上智大学イベロ・アメリカ研究所 昭50(1975) —

〔年刊〕 (参025.55; J)

前年の1年間に日本で発行された書籍と雑誌のうち、
日本語で書かれた(含邦訳)ラテン・アメリカに関す
る記事を中心に収録。国別、主題別に分類配列し通巻
の一連番号を付す。巻末に雑誌索引、著者索引を付
す。

以上の外に世界史・西洋史に関する各種の大系、講座
叢書や研究書があり、巻末に有用な参考文献がありま
す。各国史関係の単行の文献目録が少いのですが、山川
出版社の「世界各国史全15巻」(参208; S)、「世界現代
史全39巻」(本館では単行書扱いで分類—継続刊行中—)
の巻末に内外の主要な文献目録がついていますので参照
して下さい。

実例を中心とした

資料のさがし方 —19—

今回は1981年1月までに受付けた質問の中から9例の質問をピックアップしました。

〔質問例 1〕

マーケティングという用語を最初に使用したといわれるバトラーとショーについて知りたいのですが。開架室にあった「マーケティング講座 第7巻」の編者のことばにバトラーとショーという名前がのっていましたが原綴りはのっていませんでした。

＜回 答＞

バトラー・ショーの名前の原綴りがわからないので、マーケティング関係の図書、事典類で調べました。ショーは Shaw, Arch Wilkinson (1876-?), バトラーは Butler, Ralph Starr (1882-?) です。人名辞典、百科事典、マーケティング関係の事典で調べてみましたが、ショーについては「Who's Who in America 1962-1963年版」(285.3; W 書庫)に記載がありましたが、バトラーについては資料がありませんでした。なお開架室にある「現代マーケティング・ルネッサンス」(673.2; O8), 「マーケティング論の成立」(673.2; H21-2) に2人に関する簡単な記述がありますので参考にして下さい。

〔質問例 2〕

Josiah Strong (1847-1916) の著作論文と彼に関して書かれた論文にはどんなものがありますか。

＜回 答＞

日本語に翻訳された雑誌論文が見つかりませんでしたので英語の雑誌論文をさがしました。外国の雑誌論文をさがす資料として同志社大学図書館で所蔵するものは少いのですが「Readers' guide to periodical literature」(P028; R3) で Josiah Strong の項を調べると15点の著作論文および関係論文が見つかりました。これを利用して必要なものをさがして下さい。〔なお Josiah Strong の著作図書では「廿世紀の大覚醒」(1906年発行)を図書館で所蔵しています。請求記号は⑩270.4; S5 です。又国立国会図書館では「時勢と青年」(1907年発行)を所蔵しています。〕

〔質問例 3〕

「熊本県南部方言考」(齋藤俊三著)の出版年と所蔵図書館名を知りたい。出版年は1955年頃らしい。

＜回 答＞

「全日本出版物総目録」および「出版年鑑」の1948～1979年分を調べましたが記載がなく、又国立国会図書館の蔵書目録でも記載がありませんでした。「国語年鑑」に掲載されている文献リストにも記載がありませんでした。同志社で所蔵する資料では所在がわかりませんでしたので、熊本県立図書館に問合せましたところ「熊本県南部方言考」は1958年に熊本県南部方言考刊行会より出版された事がわかりました。熊本県立図書館で所蔵しており貸出は出来ないがコピーは出来るそうです。コピーが必要なならメインカウンターで文献複写の申し込みをして下さい。

〔質問例 4〕

J. Hirshleifer 著の「Price theory and applications」を購入したいのですが、定価はいくらぐらいなのかわかりませんか。

＜回 答＞

参考室にある「Books in print」で調べる事が出来ます。「Books in print」には現在発売中の図書が載っています。書名、著者名のどちらからでもさがす事が出来ます。「Price theory and applications」は1976年の発行で定価は\$16.95です。日本での定価はわかりませんので洋書取次店で聞いて下さい。なお日本の図書の価格を調べたい場合は「日本書籍総目録」を利用して下さい。

〔質問例 5〕

Federal Reserve Bank of Minneapolis が発行している季刊か月刊の雑誌名を知りたいのですが。

<回 答>

参考室にある「Sources of serials」(027.5; S8)で調べるとわかります。「Sources of serials」は雑誌を発行国別、出版者別にわけて解説してあります。発行者名からみてアメリカの雑誌ですから“アメリカ”の項目でさがすと出て来ます。Federal Reserve Bank of Minneapolis からは2点の雑誌が発行されていますが、季刊で出版されているのは「Federal Reserve Bank of Minneapolis Quarterly Review」です。他の1点は年刊の統計書ですのでちがうと思います。

〔質問例 6〕

「元和九年 心也開板古活字本 狭衣物語」(古典資料類従 勉誠社発行)の所蔵館。

<回 答>

「日本書籍総目録」で調べたところこの本は1977年に出版されています。同志社や大阪府立図書館など近辺の図書館では所蔵館は見当りませんでした。国立国会図書館では所蔵しています。なお図書館で所蔵している「校本狭衣物語 巻1～3」(913.381; S-2 開架)も“元和9年5月中旬 心也開版なる刊記をもつ狭衣物語最初の印本たる木活字12行本”を底本にしていますので、一度これを見て間に合うようでしたら利用して下さい。

〔質問例 7〕

大阪市の地下鉄の営業キロ数、乗客数、保有車両数が知りたい。

<回 答>

各種の統計を調べる時は分類目録で350;統計の項目で資料をさがすか「日本統計索引」(028.351; N)で“地下鉄”という見出し語から資料をさがして下さい。分類目録でさがすと351.63; 0に「大阪市統計書」という資料が見つかります。「大阪市統計書 昭和54年版」の188ページ、大阪市営交通機関の運輸状況の項目に営業キロ数、乗客数、保有車両数の記載があります。これによると1979年3月現在で営業キロ数は75.6km、車両数716両、乗客数は1,999,622人(1日平均)です。「大阪市統計書」は参考室にあります。又「交通年鑑1980年版」(682.1; K 参考室)でもわかります。

〔質問例 8〕

Yoshiwara, K. (Lieutenant General) 著の Southern cross, an account of the Eastern New Guinea Campaign, (Tokyo, 1955) の所蔵館、英文版でなくて原著でもよい。

<回 答>

「太平洋戦史文献解題」(028.391; I)で調べたところ原著は、吉原矩著、南十字星—東部ニューギニア戦の追憶—(東部ニューギニア会 1955年発行)とわかりました。「太平洋戦史文献解題」の著者は国立国会図書館に勤務されていますが「南十字星」については“未見”とのことわり書がありますので、国立国会図書館でも所蔵していないものと思われます。他の図書館の蔵書目録も調べてみましたが所蔵館はみあたりませんでした。「出版年鑑」や「全日本出版物総目録」にも掲載されていませんので、市販されたものではないと思われます。防衛大学の図書館に所蔵していないか、問合せましたが所蔵していないという返事がありました。著者の吉原矩氏、出版者の東部ニューギニア会の住所も調べてみましたがわかりませんでした。なお「南十字星」のうち“ラエ・サラモア”の部分が「実録太平洋戦争第3巻」に“南十字星—ラエ・サラモアの攻防戦—”として抜粋収録されています。「実録太平洋戦争第3巻」は図書館にあります。請求記号は⑨918.2; I(3)です。

〔質問例 9〕

貞方敏郎著の論文“形容詞の機能”が「同志社文学(舟橋雄教授記念論文集)」(1939年発行)に掲載されたいかが掲載巻号が知りたい。

<回 答>

参考室に“同志社大学発行雑誌論文記事著者別索引”が備えてあります。この索引は同志社大学発行の雑誌40誌を収録対象誌としています。「同志社文学」も収録対象誌ですので、この索引で調べましたがみつかりませんでした。収録もれという事も考えられますので「同志社文学」全巻の目次を調べましたが、それでもみつかりませんでした。それで“舟橋雄教授記念論文集”の方からさがしてみました。記念論文集の場合、被記念者名(この場合は舟橋雄)からでもさがすことが出来ます。著者目録でさがしてみると、旧目録で「舟橋教授記念論文集」(⑨840.4; H)がみつかりました。この論文集を調べてみると36～48ページに貞方敏郎“形容詞の機能”が掲載されていました。この論文集は「同志社文学」とは別の形で出版されています。

鎖国時代の日本人漂流記

漂流=航行能力を失った船が「海上をさまよい 流れること」(広辞苑)は死と対決する凄絶な戦いである。無限の大海中の豆粒のような島や船舶にめぐりあう可能性はゼロに等しく、強靱な肉体と精神力を持つ超人のみが奇跡的に生還し得る。江戸初期、幕府が鎖国を断行したことにより漂流の悲劇は激増した。かつて全アジア雄飛の原動力であった優秀な造船術、航海術は忘れ去られ、粗朴な和船が陸地から目を離すことなく日本列島に沿って航行するだけで一たび海難により舵が傷み沖へ流されると、殆んどが未来永劫、母国へ帰ることなく大洋をさまよい続け、やがて船は砕け、人々は浪間に消える。受難者達の最大の敵は風や潮流であると同時に日本の鎖国政策だった。奇跡的に生還できた勇者に対してもなお、この法は厳しく、彼らに罪人として日陰者の生活を強いた。しかし未知の世界を知るといふ、一般人の想像もつかぬ漂流者の体験には当然国民は大きな関心を示した。国の禁制にもかかわらず、漂流体験記は写本などの方法により広く流布した。漂流者は文字に縁遠かったため、体験記の殆んどが武士階級の調べに対する供述という形をとっているが、それでも異常体験の迫力は十分であった。江戸後期、外船の近海出没に危機感を持ち外寇を案じた国の要人や知識人にとっては、漂流者の見聞は海外事情に関する最大の情報であったことであろう。漂流記は遍歴地域の国、風俗、習慣等の貴重な記録として資料的価値がある。こうした漂流関係の写本で同大図書館所蔵のおもなものを紹介したい。

- (1) 環海異聞 15巻首1巻16冊 写本 裏表紙に清野為光又は清野彪一写とある。大正15年海老名雄二氏寄贈(旧993.7:0 貴重室)

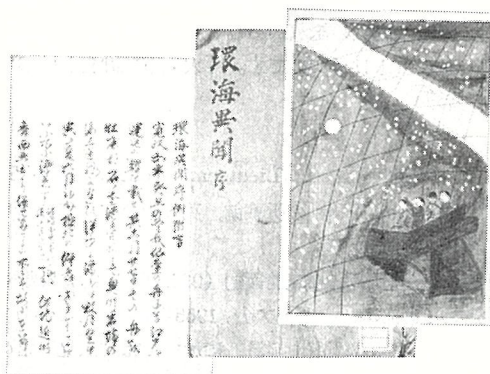
寛政5年冬江戸へ糧米を運ぶため石巻港を出帆した仙台の若宮丸(800石積)舟子の津太夫、儀平、左平、太十が暴風で難船し漂流、極北の僻島オンテレークに漂着、漂流民はロシア本国に連れられ滞在すること8年、享和2年6月に日本に遣わされたレザノフ隊に便乗し日本人として初の世界一周をし、文化2年秋蝦夷沖から日本の南方を廻り同年9月長崎に着着、その後仙台藩の蘭学者大槻玄澤と志村弘強が津太夫らの体験をきき取り3年をかけて編集したものの写しである。原本は文化4年(1807年)に著作された。巻首序の巻末に「図一百十五」とあるように全巻通じて詳細に記された文とカラー絵図(コージキ(海獺?)オクチョ鳥婦人の耳飾、衣服、銭貨、気球、プラネタリウム等々)から成り、言語、風俗、政治、経済、物産など当時の露国事情を知る貴重な資料として価値の高い文献である。なお巻十四、十五は長崎入港後の見聞(魯西亞人客館図やロシア人の肖像画など)が記されている。

同大所蔵のものではこの他8冊本、3冊本の写本もあるが、刊本としては叢文社刊、宮崎栄一編、石井研究校訂の「環海異聞」昭和51年刊が印刷も鮮明で読みやすい。

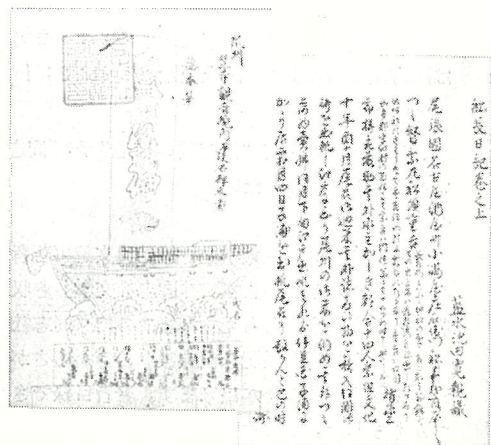
- (2) 海表異聞 全巻79冊、写本(明治以前のものらしい) 同大図の他は京大(大正5年同志社本の写し)にあるのみ、国書総目録によれば徹桑土(士?)人編、旧C081; K5(小室沢辺文庫)写本に「文鳳堂印」の朱印あり。

この叢書中、日本人漂流記に関するものは次の巻に収録されている。

- 巻六二～六六 「船長日記」有名な督乗丸船頭重吉の漂流記、62巻には文政5年霜月池田寛親のサインあり。66巻は絵図が多く巻頭にある「尾州笠寺観音境



巻十 巻末にあるゴットルプ天球儀(プラネタリウムの前身ともいえるもの)



巻六十六(船長日記巻之五)督乗丸漂流者の墓

内建石碑文図徳本筆」では漂流中の死亡者の墓が船型をよしている。

卷七二～七三 「磯吉光太夫漂流」勢州白子村神昌丸の漂流記。72巻には「丑九月東京醫官桂川甫周撰」とあり。73巻は奉行所取調の記で巻末に「寛政五、丑五月」とある。

卷七四～七六 「仙臺太平洋津太夫漂流」若宮丸の漂流記。74巻は文化元年子九月魯西亜船より帰国の始末。75巻はロシアから持ち帰った品々を列記。76巻はロシア国へ漂流の口書と「文化二年乙丑三月」の左平、津太夫、儀十、太十の署名がある。

卷七七 「太三郎の記」越中富山の長者丸の漂流記。

- (3) 魯西亜漂流記 (題簽は漂風記) 写本 17丁 旧992.09; R (小室沢辺文庫) 立原翠軒の所蔵本, 「立原任記」の朱印あり。

これは先述「環海異聞」で記した仙台若宮丸の漂流記と同じ生還者の供述書で巻末に4人の持ち帰った品々や魯西亜国からの貨物のリストがあり, 文化二年丑, 左平他三名の署名がある。いつ頃の誰の写本であるか判らないがおそらく翠軒かその門弟などの写本と思われる。絵図はない。

参考文献 ・環海異聞 ・海表異聞(卷七四～七六) ・通航一覧 卷318(旧449.1; H5) ・漂客記聞写本4 卷2冊 ・陸奥国石巻水主漂談及びロシア視婦話など。

- (4) 魯西亜国漂流記, 尾薩漂民私記「草稿」 新C 290.9; R 3(1) 49丁 (小室沢辺文庫)

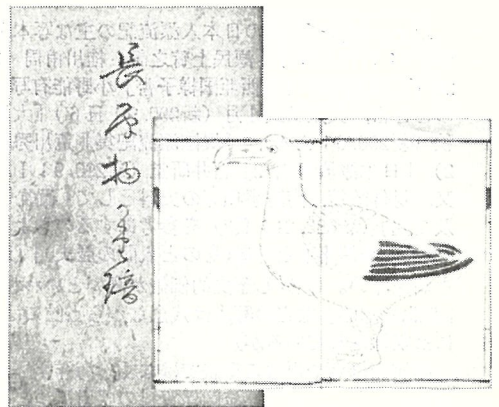
尾薩漂民私記 草稿三 新C 290.9; R 3(3) 49丁 (")

2冊本でともに写本, 立原翠軒旧蔵書, 各巻に「立原任記」「此君堂蔵書」の朱印あり。

先述「海表異聞」卷六十二～六十六の「船長日記」と同じ督乗丸漂流の次第であるが, 上巻の序のあとに「文化十四年丑六月七日写鈴木重宜」とある。(鈴木氏は号俊郷, 彰考館の翠軒の後輩で文政6年歿) 又巻末には「佐藤公業内命因而文化十四年丁丑春正月廿六日起毫。夜々燈下相綴□二月九日夜稿畢」と記されている。下巻はカムチャッカ滞留のこと, 漂民一同日本に帰国のことが記されているが, 巻末に「二月十九日夜より起毫三月二日夜燈下に稿畢, 松陽, 藤隆則」の署名がある。そのあと世界地図と各国船旗の絵がある。二巻(中巻)は, はじめからない。

- (5) 長平物語 写本 25丁 整理中(荒木文庫)

この物語は, 水もわかぬ無人島に漂着し13年に及ぶ苦闘の末, 遂に生還した男の壮絶なドラマである。土佐鏡郡赤岡浦の船(11反帆)は天明5年(1785)早春船頭儀七と水主長平他3名で赤岡浦を出帆したが沖でシラにあい難破, 漂流して無人島(鳥島)に漂着した。天水をため海草, 渡り鳥で命をつないだが, 相ついで死に長平一人生存, のちに大阪堀江船の漂着者や薩州志布志浦住吉丸の漂着者らとこの無人島で13年間も生活し, ようやく自力で船を作り八丈島へ渡り, ここで便船を待ち浦賀を経て江戸に着いた。この写本は, 無人島での長平の自然との闘い, 唯一生存の希望であった食糧としての, そして生き物としての「鳥」の描写や漂民達の人間関係が描かれていないのは残念で, 浦手形交付の為の供述書の形をとっている。しかし面白いのは始めの4丁に島の植物や鳥(あほう鳥)が画かれていることである。何人の写本かわからない。



無人島のあほうどり

参考文献 ・無人島談話, 漂流日記, 無人島漂流口書(漂流奇談全集 旧 810.8; T2-2) ・無人島より帰国之者, 御調書上留並八郎大明神由來書上共(異国漂流記集 新 290.9; I2) ・無人島漂流記 上(異国漂流記集 新290.9; I2) ・無人しまへ漂着之もの吟味書(近世漂流記集 新290.9; A-2)

なお, この物語をテーマに書かれた吉村昭著「漂流」新潮文庫昭55.11刊が今年6月映画化される。

- (6) 東帰異聞雑記 (題簽は北亜墨利加州漂流記) 写本64丁。安政元年卯年夏 吉村金助写 旧990.9; S12 昭和23年 奥村龍三氏より購入。嘉永壬子秋8月 瀬東水詠の序あり。

紀州日高の天寿丸(950石積)が嘉永2年(1849), 船頭虎吉(寅吉)と水主12名で江戸に蜜柑の商いに行った帰途大時化に逢い八丈島沖で漂流。洋上でアメリカ捕鯨船に救出され, アメリカに着き後ヲヲホ(ハワイ群島)からヒョンコン(香港), 上海を経て翌年末長崎に帰着したという漂流記である。この写本は 嘉永4年帰国した時の漂流次第

が記され、巻末には、日（サン）月（ムラニ）星（シタス）風（ウイス）金（コウル）銀（スルハ）やー（ワン）二（チウ）三（ツルイ）四（ボウ）など日英対照語が記され、口聞書のため発音通りなのが面白い。

参考文献 ○紀州船天寿丸漂流談（漂流奇談全集）○紀州船米国漂流記（校訂 漂流奇談全集 旧810.8；T-2）
○天寿丸オロシヤ廻り漂流記2巻写本（竜大図）○蕃国記3巻写本（竜大図）○東帰異聞雑記（東大史料編纂所）

(7) 亜米理軒見聞記（題簽なし）写本，上中下1冊，52丁 整理中（荒木文庫）

摂津国兵庫中村屋持船栄寿丸（永住丸）1,200石積の善助，初太郎ら13名が天保12年（1841）秋，犬吠崎沖で流され4カ月程漂流の後，外国船に救出されカルホルニアに着いた。翌年11月同地を出帆，広東奥門に着きここで加賀の漂流者とともに乍浦に渡り，又奥州伊達船漂流民と合流，弘化2年暮，長崎に入港した。この写本は，帰国後の供述で漂流中のことやカルホルネのコマンドテンという人から横文字を習ったこと，西瓜，まくわが年中あり非常にあたたかい国であるなど，アメリカ見聞の次第が述べられている。いつ頃何人が写したかは不明。

参考文献 ○亜墨新語（校訂漂流奇談集 旧810.8；T-2）○海外異聞（異国漂流譚）○栄寿丸漂流口書（異国漂流記 集新260.9；I2）○初太郎漂流記（近世漂流記集 新290.9；A-2）○東航紀聞（国会図6巻のみ現存）

(8) 安南漂流記 写本，上下1冊，21丁 整理中 明和5年戊子2月 浄楽寺写

常陸国多賀郡磯原村の姫宮丸（12反帆）船頭左平太他5人は明和2年（1765）銚子で米を陸揚げし，その帰途強風に逢い東方海上に流され43日めに安南に漂着。そこで安南村民と生活した。明和4年トンダイクワンという人の南京船が入港したので，姫宮丸を売り南京船に便乗しホイアンを出帆，7月に長崎へ帰着した。この写本は明和4年12月磯原村に帰国し，安南漂流の顛末を述べた口聞書で「上」の巻末には，安南国から貰ったもの（扇子，孔雀の羽，絹，煙草入，羅紗など）が記され，「下」には安南の言葉がある。（一モツ，二ハイ，三ハア，四ボン，五ナム，父チャク，母ヨウ，妻リバク，大豆トカンなど）

参考文献 ○安南国漂流物語（校訂 漂流奇談全集，旧810.8；T-2）○通航一覧 巻177（旧449.1；H5）○日本庶民生活史料集成 5（新210.5；N2）

以上，同大図所蔵の日本人漂流記の主な写本を挙げたが，この他写本では「漂流記共三」3冊江戸末期と推定（新293.8；H U～3），「漂民上覧之記」桂川甫周 35丁 天保11年（新293.8；K），「土州漂流記」村上氏写 嘉永7年20丁 整理中，「魯西亜国様子書」小野能有写 35丁 嘉永7年（新290.9；K3），「漂海漫草」菊蔵，和蔵，仁七のきき書，文久壬武4月（新290.9；H6）「大黒幸太夫漂民上覧之記」安政4年が，刊本では「日本漂流誌」相川広秋（新290.9；A4），「異国漂流記集」荒川秀俊（新290.9；I2（1.2）），「近世漂流記集」荒川秀俊（新290.9；A-2），「日本漂流譚1，2」石井研堂（新290.9；I3），「校訂漂流奇談全集」石井研堂（旧810.8；T2-2）などもある。又，対外政策，海防事項等の史料として「通航一覧」（旧449.1；H5）や海外関係の法令文書を集めた「海事史料叢書及び続」（新683.21；K3）を参考にするのもよく，船舶については「日本科学古典全書 12（旧508；N）」の中の「和1～20漢船用集」と「船（ものと人間の歴史）」（新550.2；S2）を，言語については「漂流民の言語」（新818；M3）も興味深い。しかし歴史的価値が高いといわれている「時規物語」や同じ事件を取り扱った「蕃談」，神昌丸の漂流記「北槎聞略」などの写本は残念ながら当館にはない。（これらは刊本として日本庶民生活史料集成 5 新210.5；N2には収録されているが）

漂流記は今や単なる奇談ではなく，海洋学，気象学，言語学，海事史，文化人類学の立場からきわめて重要な研究資料といえる。現在漂流関係資料の収書につとめているので，来年当館で催す「漂流記資料展」をぜひご覧いただきたい。

《訂正》

びふりおてか №28 英語・英米文学に関する 二次文献(2)の記事中，英文科とあるのは 英語英文学科研究室の誤まりです。訂正してお詫びいたします。

“びふりおてか”	同志社大学図書館報	№ 29	1981年4月1日 発行
発行	同志社大学図書館	京都市上京区今出川通烏丸東入	電話 251—3971
編集責任者	楠見恒伸	（図書館庶務課長）	印刷 爲國印刷 KK